

# 高杉晋作の主治医 石田精一について

——変革期草医の「雅」と「侠」——

亀田 一邦

九州国際大学付属高等学校

受付：平成20年12月5日／受理：平成21年7月31日

**要旨：**本論は幕末馬関の町医師石田精一に関する初の論考である。精一はもと厚狭郡埴生浦の医家であった。博多の百武万里に蘭方を学び、帰郷後は流行医となるが、嘉永以後、文雅者としての評価が高まり、安政初に下関へ移住、文久期には当地の文人交流史上に甚だ重要な位置を占めた。慶応期には伊崎の幽境小門へと居を移し、萩本藩の正義派諸士との交際も開始され、特に高杉晋作からは主治医兼詩友として厚遇された。また政治的行動も顕著となり、野村望東尼の姫島救出や萩藩の密鑄銭事業に深く関与していたことが判明した。

**キーワード：**石田精一、広瀬旭荘、高杉晋作、野村望東尼の救出支援、密鑄銭事業の画策

## はじめに

慶応3年4月14日、高杉晋作は下関での療養も空しく、満27歳8カ月の短い生涯を閉じた。その際、遺族は李家文厚(7両2歩)、熊野祥甫(7両)、石田静逸(5両)、竹田祐伯(3両)の4人の医家に葉礼を贈り、晋作生前の厚治に報いることを忘れなかった<sup>1)</sup>。

李家、竹田の両家は萩藩医中の名門として聞こえ、熊野家は老臣国司氏(5,600石)の抱医であった。3者は攘夷・対幕戦時に萩藩が設置した馬関をはじめとする各地の軍陣病院に出張、戦時医療の充実に寄与し、幕末の防長医学史上に名を残した人々である。

いまひとりの石田静逸(精一)は馬関に開業する町医師であった。この人物に関しては村田峰次郎<sup>2)</sup>、横山健堂<sup>3)</sup>の高杉伝には言及がない。近年、梅溪昇<sup>4)</sup>、青山忠正<sup>5)</sup>は咯血時の来診医家として掲出したが、海原徹<sup>6)</sup>は事象のみを記して医師名を省き、これら最新の著作にあっても依然として軽微な扱いがなされている点は明瞭である。周知のごとく高杉は萩藩が存亡の命運を託した若き英

傑である。その青年革命家の終末期医療に深く関わった唯一の町医を、経歴未詳のままに長く放置し続けることが果たして許されてよいものであろうか。

筆者はこのような史家の精一に対する冷やかな態度には賛同できない。なぜかといえば、近世防長の儒医研究を進めるうちに、期せずして精一に関わる資料も漸増し、それらは一様に圧倒的存在感の持主として精一を描いており、到底このまま取り上げずに済む医家ではないことが直感されたからである。関連記事は生涯を網羅するとはいえないものの、ほぼ時系列的考察に支障のない段階にまでは到達している。そこで本論では現時点でカバーされる嘉永初から明治初を範囲とし、変革期の下関で強烈な個性を發揮した石田精一という町医師の事績を探り、幕末の地方文化史及び政治史上に彼が果たした役割やその存在意義について考察したいと思うのである。

## (1) 厚狭郡埴生浦の雅医としての活躍

後掲の高杉書簡にあるように精一はもと「はぶ浦之地下医<sup>7)</sup>」であった。「はぶ浦」とは周防灘に

面した厚狭郡埴生浦(山陽小野田市)のことである。天保末の埴生浦には商家22軒があって町並も形成され、決して辺鄙な漁村ではなかった<sup>8)</sup>。当浦の医家については『防長風土注進案』(吉田宰判領、天保12年以降成立)に「地下医者壹人」<sup>9)</sup>と見え、これが石田家のことかと思われる。防長の民間医家は郡村政下にある農漁村では地下医、町政下の市街域では町医と呼ばれた。両者は藩が公認した開業医であり、他所から流寓して勝手開業した非正規医は浪人医師<sup>10)</sup>として区別された。これらの中には上級藩士や有力寺社の抱医となるものもあり、陪臣医、家来医、家医、邸医などの名称で呼ばれ<sup>11)</sup>、士分に準ずる待遇を受けた。長く戦時体制が維持された幕末の防長では諸士も医師を必要とし、民間から登用される陪臣医が急増したが、いま精一がどこかの抱医であったことを教える記録はない。なお海港下関の医師開業制度については、若干の説明を要するため後述したい。

この埴生浦在任期の精一の様子が知られる資料が2種ある。現在最も早く精一の名が確認されるのは意外にも地元の資料ではなく、上方儒家の詩文集である。嘉永元年9月、精一は大坂を代表する文文学者の篠崎小竹に書簡を寄せ、家蔵の名家詩画冊に序文の寄稿を依頼した。小竹は書面を読み、未知の相手ながら言辞に誠実な人柄が想見できるとしてこれを承諾した。それが『小竹斎文稿』に収められた「書画帖の序／長州土生浦の石田精一の為に」と題する以下の一文である。

長州の石田精一、書を寄せて蔵する所の書画帖に序せんことを乞ふ。余、未だ其の人を識らず、又未だ其の集むる所、何等の書画為るかを知らず。然れども其の書に曰く、前日僧に託して請はば、僧云ふ、先生、多事を以て辞せん。未だ然否を審らかにせず。伏して願はくば拒まれざらん。懇ろに之を請へど。意、紙上に溢る。予、是に於て其の序を求むることの泛然たるに非ざるを知れば、人を扱ばざる者なり。其の書又曰く、聞く、客冬、来船、頗る文人を載す。故に帖を長崎に送り、其の筆跡を索むれば、来示すること能はざる所以なりと。予、是に於て其の

聚めし書画跡の泛然たるに非ざるを知る。多くを求め、得るに務めんとせば、玉石雜糅する者なり。則ち未だ其の帖を觀ざると雖も、帖の賞すべきや必せり。未だ其の人を識らずと雖も、尋常好事の徒に非ざること必せり。是に書す<sup>12)</sup>。

おそらく精一は埴生浦で流行医となり、経済的余裕を生じた結果、潤沢な謝金を用意して著名家への依頼に及んだものと見られる。客冬に清国文人が多数来崎したという情報は、埴生浦に寄港した船客から得たと思うが、これに即応して長崎へ書画帖を持参させる行動力と熱意が小竹を「尋常好事の徒に非ず」と感心させた最大の理由であろう。精一は瀬戸内の小漁村に住みつつも一流の詩文書画を愛好し、すでに文雅者らしき片鱗を見せている。上記の「書画帖」が伝存していれば、交渉文人の特定以下、精一の嗜好や諸家の地域分布等も克明に分析できたはずであるが、諸事情から察してもはや発見は絶望的と思われる。

嘉永末になると精一の文名は次第に上がり、厚狭、豊浦両郡を中心とする長陽地方に詩家として重視された。その点は豊浦郡宇賀の村医古谷道庵が残した日記の記述が参考となる。道庵は広瀬旭莊の高弟であり、医学を坪井信道、難波抱節等に学び、長府藩家老大毛利氏の筆頭抱医となった。淡門の詞華集たる『宜園百家詩』初編には豊閑4家のひとりとして4首の採録があり<sup>13)</sup>、詩才にも恵まれた幕末北浦を代表する在村教養人であった。従って普段から防長の詩文人や詩壇動向に対しても関心が高く、各地詩家とも交流を密にして文学の研鑽を怠らなかつた。『古谷道庵日乗』の嘉永5年閏2月17日には次の記事がある。

書を作して土生浦の人、石田某に贈る。其の書に曰く、一日、診事に因って美和君と相会す。一家に於て医談既に畢り、詩に及ぶ。君懐より一紙を出して余に視せて曰く、是れ石田某の詩なりと。吟じ来れば閑情余り有って逸興紙表に溢る。嗚呼、聞く、石田君なる者は、南方の医伯にして、將に東候西診して病事に暇あらず。而るに其の胸中には斯のごとき閑日月なる者有

り。余、欽羨に勝へずして、其の瑤韻に次し、遙かに相寄せ、併びに玉斧刪正を請はんとする者なり<sup>14)</sup>。

同じ字賀の医家である美和尚策と忠家に往診した際、埴生の石田某が優れた詩家であることを教示され、道庵は早速、挨拶代りに詩を送って批評を乞い、これを機に末永い雅交を希望した。美和には嘉永元年10月6日を初度とする数次の埴生行があるから、その際に交遊が展開し、精一の詩人的力量を認めたものと思われる。残念ながら道庵日記には精一の詩は掲載されていないが、幸いにも道庵の贈った2詩があり、これによって精一の人柄や生活を垣間見ることができるようである。

未接春風面 未だ春風の面に接せざるに  
 誦詩遠思深 詩を誦すれば遠思深し  
 国医正君志 国医は正に君が志  
 村老是吾心 村老は是れ吾が心  
 帰雁白雲巔 雁は白雲の巔に帰り  
 遷鶯修竹林 鶯は修竹の林に遷る  
 韶光追日好 韶光日を追って好し  
 何処共行吟 何れの処にか共に行吟せん

「国医」は技量抜群の医家をいう。自分は静かな田舎暮らしを好むが、尊兄は医術の大成を期して日々精進を続けていると嘆称し、近い将来ともに自然の風物を愛でつつ、ゆったりと詩を語り合いたいものと、精一へのひとかたならぬ思慕を告げる内容となっている。

何処□人方考槃 何処の□人ぞ方に考槃せんとし  
 依々樹影望団欒 依々たる樹影団欒を望む  
 春眠漸醒喚無語 春眠漸く醒めて喚べども語る無く  
 詩味濃時幾忘餐 詩味濃やかなる時幾んど餐を忘る

「考槃」は隠居部屋を作り、悠々自適に暮らす意である。道庵は地元で雅人の少なさを嘆き、今

後の交遊を通じて自分に韻事の楽しみを与えて欲しいと、相手に願ったのである。

天保末の北浦詩界の重鎮による高い評価と真摯な交際の要請は、精一に対して長陽各地ではほぼ同様の支持があったことを示唆する。道庵の住む旧豊浦郡の日本海沿岸部を北浦と称したが、当地の文事をリードしたのは、佐々木発平、古谷道庵、川田健明、西島哲平、石川音平、江藤桂庵等、詩学重視の教育を咸宜園で受けた面々であり、この地に比較的韻事が盛んとなったのも僧侶を含む旧淡門生が多数あったことに起因する。宜園派は北浦から厚狭・吉敷方面に勢力を有し、有能な藩儒官医を供給、民間医家の多くも地域医療や教育の向上に貢献していた。道庵の友人で吉敷毛利家抱医の梅本健明（厚狭郡東須恵村黒石）は、世評高い村上仏山の詩を「腐作、見るに堪はず<sup>15)</sup>」と酷評したが、これなども一帯の旧淡門生が権威に盲従せず、各自が錬成した審美眼を信じ、主体性をもって詩文鑑賞を楽しんでいた好例として扱うことができよう。

北浦詩壇の領袖であった古谷道庵から雅交を切望され、気鋭の詩家として注視されていたことを伝える上記の内容は、精一が優れた医人であると同時に韻士の才力を十分に備え、長陽文化人中に確固たる地位を築きつつあった現実を教えている。

石田精一は嘉永期に萩本藩領である厚狭郡埴生浦に流行医として家業繁盛し、また地方詩家としてもひとかどの才識を認められながら、当地で将来の雄飛に備え、胎動の時間をポジティブに過ごしていたのである。

## (2) 長府領馬関への転住と文人的成長

長陽地方に詩名が高まるにつれ、精一の心境に変化が萌す。このまま刺激のない小漁村に一生を終えるよりは、医業の傍ら同好の士と常時交遊し、西国往来の名家を招引して雅交を楽しみたいとの夢を思い描くようになる。すなわち精一は埴生浦では詩人医家としての成長に限界のある点を自覚したのである。そんな彼が理想の地として選んだのが、西の浪華と称されて繁栄を極めた商都

馬関であった。

移住は嘉永末から安政初の間に行なわれた。その背景には前記の上昇志向の他、外的要因として嘉永3年2月26日の大火が指摘できるようである<sup>16)</sup>。その際に恐らく精一宅も罹災し、以後、長期にわたる浦方の疲弊が活計の存続を危うくすることとなって、これを契機に離浦の決断がなされたものと推測される。

ところで精一にとって新天地となった下関の医師開業制度の実態は、残念ながら今もよく解っていない。本稿も現段階での詳細な論及は避けたいが、それでも「嘉永5年医師中御達書<sup>17)</sup>」及び『白石正一郎日記<sup>18)</sup>』の記載に従う限り、下関(萩藩、長府藩、清末藩、長府藩家老細川家給領地に分割統治)には厳格な開業統制、すなわち株制度は存在せず、一応藩医による試問は課せられていたが、在地有力者(町役、富商等)が身元保証人となれば、比較的容易に居留開業が認められたようである。人口の増減が少ない農村部では医家の需給調整は不可欠であるが、下関は周知の通り、北国、内海、九州といった我が国幹航路の中継・起終点として有数の商港であったことから、常時かなりの流入人口を抱え、往来滞泊の旅人買客も繁く、医家にも相当な需要が見込まれた。そのため幕末の下関は海陸交通の結節点であると同時に、一種の保養拠点としても機能したのであり、良医の確保は市勢発展に直結する重要な課題と認識されていた。そこに競争原理の積極的導入による医界の活性化、淘汰による良医育成、医療の高水準化といった潜在的な要求があったと見なければならぬ。その点に照らしても、当地での開業医制度は請人連署の届出認可制という簡素化されたシステムが基本であったと考えられ、すでに社会的信用が確立していた精一の来関などは、大いに歓迎されるものであった。

安政初における精一の来関開業を示す唯一の文献が、広瀬旭荘の『日間瑣事備忘録』である。旭荘は安政3年6月8日から29日まで滞関、そこに「マツ 医人石田清逸来り見ゆ。字を乞ふ<sup>19)</sup> (6月19日)、「石田精一来る<sup>20)</sup> (同21日)とわずかながら登場する。この記述から遅くとも安政3年夏ま

では精一が馬関に来ていたことが証明される。さらに旭荘は6年後の文久2年10月10日から11月9日までの赤関行で精一と再会、親密な交際を展開した。以下にその詳細をたどりながら、雅医としての精一の本領がいかに発揮されたかを具体的に検証し、幕末の馬関文人界における彼の位置を確認することとしたい。

文久2年10月15日、まず精一は子息が咸宜園に在学する関係から旭荘に酒肴を贈った<sup>21)</sup>。宜園で中継役の青邨が林外(旭荘嫡男、淡窓養嗣子)に塾主の座を譲ったのはこの年である。同時期の入門簿を見ると「文久2壬戌8月19日/長州下ノ関沖島/石辺鉄平/石辺精一 一棹/15歳<sup>22)</sup>」がある。「辺」は「田」の誤である。精一の子は旭荘来関の2カ月前に宜園入りしていた。紹介者の広田経太郎は同年2月19日の入門で、秋穂天田村の広田三省(吉敷毛利家抱医)の男である。広田氏は山内玄龍(秋穂)、永沢柳庵(三田尻)、時沢千哉(美祢)等、周辺の郷村医と交流があり、以前埴生浦にあった石田氏もそのネットワークに含まれていた感がある。なお鉄平は後に長門深川の医家松浦秀庵の倅亀之進、肥前長崎の深窓寺弟子の恵雲、観善寺弟子の連城の3者を紹介するが、そこには正しく「石田鉄平」と記載されている<sup>23)</sup>。

入門簿には在所を「沖島(おきのしま)」と記す。これは長府領本関の王子町に属する小字である。旭荘日記(10月16日)の以下の記載から石田邸のおよその位置が判明する。旭荘はまず大森玉池軒に牧野青霞の居所を聞いてこれを訪ねた。西端の玉池邸から「王司坊を北行すること2,3町、西折して裡巷に入ること1町、左は畔にして街尽くる処、即ち青霞の僑居なり<sup>24)</sup>」とあるから、青霞は田中町付近に住んでいたことになる。次に旭荘は青霞の寓居から石田家に向かう。その道筋を「東行すること2町許、左折して裡巷に入れば水涯に1家有り。即ち精一氏なり<sup>25)</sup>」と説明する。これに従えば現在の唐戸周辺が該当し、入門簿に記載する沖島と完全に一致する。

また精一の家族構成についても旭荘日記に記載がある。訪問時、精一は不在で妻と母堂が出て茶を供した。旭荘が子息は元気に学業に励んでいる

と伝えると、祖母は喜んだが母親からは何の謝辞もなかった。そこで旭荘は継母かと疑ったが果たして後に予想的中を知る。この描写は思春期の鉄平と後妻の同居が多少軋轢を生じていたことを暗示しており、精一がその回避策として遠方遊学を子息に提案、これを鉄平が受け入れて実現したと見てよいだらう。しばらくして精一が帰宅、楼上に酒肴が用意され、宴には愛妾が侍座した。精一は座興に豊野慶次郎と呑み競べをしたが、旭荘はその妻まじい酒量に舌を巻いた。以上から精一の艶福家かつ大酒豪であった点が知られ、この2点は馬関での精一の文人的成長を考える上で特に記憶すべき事項と思われる。

次に性格・人柄については11月4日の記事が参考になる。そこに至るまでに旭荘側に若干の誤解が生じており、まずはこの点に触れておきたい。10月29日、尺八の名手桂一敬（虚無僧宗俊）の子息が道端で1枚の紙片を拾って持ち帰ったが、文意を解しかね、子供が学ぶ南条董一郎（淡門）のもとに持参した。南条はこれを机上に置いたまま無言である。一敬はこの様子を見て旭荘を中傷する内容であるからに相違ないと察した。早速このことを旭荘に告げると、旭荘は精一の仕業であろうと推断した。根拠の第1には、当初精一は頻りに顔を出しては画賛を欲していたが、旭荘が画賛ではなく詩を贈ると全く一言の礼もなく、それを不満に思っているらしい点を挙げた。確かに精一は19日に画賛を催促して以来顔を出していない。第2に旭荘が当地の文人と親しくなるにつれ、それまで仲間内で推重されていた精一の立場が後退することは必定であり、この点を悔しがり、再度盟主の座を奪還しようとして当方を故意に貶めたのであろうと推測した<sup>26</sup>。後条に述べられた対精一批判の裏側には、当地における雅人精一の高い評価が隠見する点に注目したい。この説明に基づけば、文久2年の段階においてすでに精一は馬関文人界に一定の影響力を行使する立場にあったことが知られる。

しかし、上記の精一に対する旭荘の非難は、臆測の域を出るものでなかったことが、11月4日に判明する。以下は精一を含む幕末馬関の文人連の

行動が活写された貴重な一節であるから、やや引用が長くなるが雅会の委曲を把握するため全文を書き下して紹介したい。

余、玉池の招きに赴く。主人小室に引き入るれば、茶鼎方に鳴る。青霞及び二客至る。茶畢りて鮓を供す。畢りて客をば導きて楼に上る。楼払拭して太だ潔陳たり。掛くる所の書画器具は皆極めて精好なり。満座氈を布き、高机二脚を置く。客机を挟んで坐す。少間して（茶屋）慎二郎、（大庭）学仙、及び生客七八人至る。石田精一尤も後れて至る。余に謝して曰く、某、先生を旭亭に訪へば、其の既に瓜生氏に去りしを聞く。将に拝さんとして趨くも、風雨の阻む所と為って未だ果たさざりきと。慎次郎曰く、先生は公の其の贈詩するも悦ばざるを謬解すと謂ふが故に濶するなりと。精一曰く、豈敢へてせんやと。机上忽ち書一紙を出して曰く、壬戌十一月四日、冷雲楼茶会、玉川式に依る。又闘茶四品、一に曰く老松、一斤の直ひ銀六十匁。二に曰く雀舌、銀十匁。三に曰く初真、銀九十匁。四に曰く客茶。直ひは未だ詳らかならず。皆宇治の茶師辻善貞の製する所なりと。既に客をして嘗めしむ。客各々片紙に書す。曰く、蓋し直ひ若干なる者は末に書せと。已に名主衆紙を輯め、一盒中に入れ、茶四周すれば則ち盒を開け、以て当否を験す。或は皆当たらず、或は一当、或は二当、其の四ながら皆当たたる者は唯一人あり。乃ち賞するに二扇を以てす。而して余は一当三否、慎次郎等多くは皆当たらず。茶畢りて酒出づ。秀三来り迎ふ。精一忽ち一紙を書し、客に遞示して曰く、請ふ、諾否を記せと。視れば「欲東行何如」（東行せんと欲す。何如と）の五字有り。東行とは即ち妓院に飲まんとするなり。慎次郎、青霞等、皆既に諾と書す。余のみ独り否と書す。亥の下牌、同衆辞し出づ。青霞、精一等、将に余を要して乃ち疾走して顧みざらんとす、既に稲生町口より乃ち徐歩す。衆遂に妓院に入る<sup>27</sup>。

大森家は馬関最古の家柄を誇り、代々萩・長府

兩藩の御用硯師を勤めた。馬関では眺望のよい2階座敷での接客が好まれ、当日は10名を越える雅客が西端の大森家の冷雲楼に参集した。闘茶は精一が担当して事前準備を進めた模様である。作法は江戸初期に京の大森漸齋が創始した玉川式を採用、供された4種の煎茶は全て由緒ある宇治茶師の辻善貞が謹製した高級品であった。『白石正一郎日記』(安政3年4月23日)に善貞の所から野村新八なる者が当家に茶壺を受け取りに来たという記録があるから<sup>28)</sup>、辻家の販路が遠く下関にまで及んでいたことは明らかである。この茶品の奢侈に比べて勝者へ贈られた褒美は扇子2本と実に質素であり、それは東洋外人が理想とする淡交の精神の具現化でもあった。

本条の精一は明朗闊達、社交上手の好人物として描出されている。話術や娯楽の演出に長け、サービス精神に溢れ、客の気を惹くことが巧みである。旭荘の意を察した茶屋慎次郎が例の1件を追及すると、精一は「豈に敢てせんや」と強く否定し、無沙汰は天候不順が理由であると釈明した。確かに前月19日に書状で画賛を催促して以来、「大雨傾盆」(21日)、「終日陰雨」(22日)、「終日大雨暴風」(25日)、「終日陰雨」(11月3日)と悪天候が続いた<sup>29)</sup>。この日も「卯下牌(午前七時頃)雨止風興」とあり、完全な回復には至っていない。しかもここまで手間と予算のかかる雅会を憎しみを抱く相手のために準備するとは考えにくい。その点も旭荘側を納得させるに十分であったと見え、結局、風雅な時をともに過ごしたことは、双方の感情的対立が融け、精一に対する信頼が回復したことを意味している。ただ今回の茶会は結果的に精一の才腕を際立たせ、文人中に一段と存在感を増したことは否めず、第2の推論についてはあながち曲解とばかりも言えぬようである。それほどに精一の人柄や戯芸に対する斬新な発想と周到な準備や演出の手際は、参加者を瞠目させるに十分であった。2次会に稲荷町登楼を誘う趣向も野卑の感がなく、遊興への洗練されたセンスの持主であったことを証明しており、多数の文人たちとの交流も精一の人柄と趣味・遊芸に対する優れた感性や創造力に彼らが魅せられる形で成立し

たといっただろう。当地では随時こういった雅会が催され、精一もその才覚と性格により頭角を現し、各方面より招引を受けて、馬関文人界の寵児となるべく、1歩また1歩と着実に階段を上って行ったのである。

ときに文久2年といえば、通商開国、公武周旋を藩是としていた萩藩が、尊王攘夷へと大転換した年である。その結果、急進尊攘派が台頭し、半年後には列強を相手とするいわゆる下関戦争が勃発する。馬関防備が本格化するのは翌年3月頃からであるが、この時期も外艦の不時寄港や外国船員の狼籍等が頻発、対外感情は急速に悪化し、市民生活は不安と緊迫の度を増していた。そのような状況下に全国の尊攘派有志が国防拠点の下関に集結したことから、一般に幕末馬関は慷慨型の志士文化の席卷地という印象が世上に蔓延している。しかし上掲の旭荘日記を読むと、確実に喧噪さを増す文久2年秋冬の時期にあっても、当地の中間的知識人は安閑と文人趣味を満喫していたのである。石田精一もこの段階では政治的行動を起こさず、近世雅医の典型として存在するに過ぎない。地元文人にも対外脅威への危機意識など微塵も認められず、また時代変革の予兆を鋭敏に察知して時勢に応じようとする能動性もなく、平穏な時間を共有し、精神的余裕を保って優雅な趣味世界を堪能する姿のみが顕著である。

なるほど幕末馬関に時代精神を反映する志士の文化が溢れ、若者が志気を純粹燃焼させたことは事実であろう。しかしながら、他方にかなり成熟度の高い文人的世界が攘夷戦の半年前まで存続し、長府藩の町行政の末端を担った富商以下、儒医、硯工、彫刻師、画師、奏楽家といった市井の業家衆を主要構成員とし、さらには滞在・寄寓諸家をこれに包含する形で積極的な文人交流の場が設けられ、自己充足と相互陶冶が図られていた点も見逃してはならない。今後、幕末の馬関文化の特性については従来とは異なる多角的視座のもとでの再検討が必要となって来よう。旭荘が活写した石田精一の文人活動の実態には、このような地方文化史に関する抜本的見直しを迫る重要な問題提起も含まれているのである。

### (3) 清末領小門移居と正義派諸士との交流

#### (a) 高杉晋作

安政初に一家を挙げて下関に移り住み、文久期には当地文人界の一翼を担う著名人となっていた石田精一であるが、好事家としての評判が高まる過程で高杉他の萩藩尊攘派の有力士と邂逅することになる。世上伝える通り、高杉晋作は詩人的性格を濃密に有する天才の軍略家である。精一の文雅者の側面が実証できたいま、両者の交誼が詩文雅事を媒介として深まったと考える点にまず異論はあるまい。

晋作が心身の所労により不快を訴え、萩藩医長野昌英の診察を受けたのは第2次征長中の慶応2年7月末であった<sup>30</sup>。高杉はこの頃から体調の悪化を自覚したが、激務が連続して病状はさらに進行し、九月初めに血痰を吐く。その際、白石正一郎は晋作が心を許した町医の精一を往診に招いた。在関高杉の診療に関与した萩藩医はみな一流の蘭医であったが<sup>31</sup>、いずれも安静と滋養を説くに止まった。勿論これは当時の医療水準を考慮すれば何ら非難に値しないが、他方、西隣の草医たる精一が晋作の命に対峙した姿勢もまた高く評価されてよい。そもそも詩文酒色の雅俗万般に精通し、明朗で豪放な性格をもつ精一に趣味嗜好の類似する高杉が好意を抱かぬ訳がないのである。精一は病者の生命力の活性化を重視し、晋作の精神的ストレスの緩和に努めた。その点こそが石田を主治医として扱い、深い信頼を寄せた最大の理由であったと考えられる。

高杉の漢詩集である「捫蝨集」(『捫蝨処草稿』所収)には精一との交流を詠んだ「酒を梅堂石田氏の家に酌む。即吟」(五絶)、「石田静逸に同行す。詩有り。其の韻に次す」(五絶)、「石田精一を訪ふ。酔中偶成。九月八日」(七絶)の3篇があり<sup>32</sup>、それらに交遊の状況を窺うことができる。同集は自序に「乙丑初夏」(慶応元年)と記すから、いずれも早期の接見時の作と見られる。ここでは繁を避けて重要点のみを示そう。まず両者は酒色を人生の至福とする価値観を共有した。また晋作は当地に名高い酔仙精一を「梅翁」と親

しげに呼ぶ。精一は晋作の無聊を慰める数少ない同好の士であり、文学的飢渴からの救済者であった。梅翁を慕う最大の理由もその点にあった。勿論そればかりではない。晋作は精一の診治に厚い信頼を寄せ、名医としても敬重した。以上のごとき事実が3詩から分かるのであり、晋作詩は両者の交誼の深度を推し量るに不可欠な情報を提供している。

高杉が招かれた石田邸は、旭荘を訪ねた沖島の家とは異なっていた。正一郎の歌集『松のおち葉』に「石田精一が小門の家所をとぶらひて酒など物して夕ぐれになりければ」(見わたせば光もしろくなりけり月の出しほの小門のいさり火)<sup>33</sup>と記すように、慶応期は小門(おど)に住んでいた。ただこれが完全な転居なのか、それとも依然沖島に本宅は残し、妾宅を当地に構えたものかは分明でない。小門は小瀬戸に面した伊崎浦(清末藩領。慶応元年7月より萩藩へ貸与)の先奥に位置する景勝地であった。関門海峡は大小の瀬戸に分かれ、九州側との海峡を大瀬戸、彦島と伊崎の間を小瀬戸と称した。高杉が訪れたのは新地から程近い小門のほうである。馬関を訪れた文人墨客は好んでここに遊んだ。やや時代は下るが明治10年の落合虚舟「小門焚記」<sup>34</sup>、同19年の王治本「伊崎襟流亭記」<sup>35</sup>は、名物の夜焚漁とともに周囲の景観を精写し、ともに小門の清趣を絶賛している。

晋作の最晩年に書かれた『丁卯詩稿』(慶応3年)中に、亡くなる1、2カ月ほど前に詠じた「小門の夕棹舎に遊ぶ」<sup>36</sup>と題する詩がある。小門に住む知己は精一の他になかった。重い病状にも関わらず小門へ独行した目的は、親友石田梅堂を訪問して小瀬戸の景物を愛でつつ、談話を楽しむこと以外に考えられない。

軽暖軽寒春色晴 軽暖軽寒春色晴れ  
閑吟独向小門行 閑吟して独り小門に向ひ行く  
梅花凋落桜猶早 梅花凋落して桜猶ほ早く  
窓下唯聴夕棹声 窓下唯聴く夕棹の声

夕棹舎は小門の精一邸の雅称であろう。晋作はこの屋舎の雰囲気を好み、再三訪れては精一との

飲談対酌に興じたのである。本件の考証に際してやや注意を要するのが、現行の東行詩集には掲載がないものの今日まで晋作詩として伝える扇面詩である<sup>37)</sup>。真実これが晋作の手になるものであるとすれば、詩題は「石田静逸に贈る」とでもすべきものであろう。

馬関西尺処 馬関の西尽くる処  
 占宅避紅塵 宅を占ひて紅塵を避く  
 纔有供茶井 纔かに茶を供するの井有るも  
 更無乞醜隣 更に醜を乞ふの隣無し  
 凌山収墜橋 凌山に墜橋を収め  
 前水網飛鱗 前水に飛鱗を網す  
 此際唼遠醉 此の際に唼じて遠酔するは  
 小門静逸人 小門静逸の人

署名は「丙寅首夏(慶応2年4月)／夕棹漁者」とある。晋作に小門仮寓の事実はない。馬関の西隅に街巷の喧騒を避けて居宅を構え、夕棹舎と命名したのは石田精一である。上掲の五律は老熟の度合が高く、気韻の面で他の晋作詩とは相当に趣を異にする。内容的にも茶酒ともに愛飲した精一をより髣髴とさせる。「醜」は醇酒の意であり、自ら好んで世塵を避けて閑居したにも関わらず、近隣に酒肆酒友のない淋しさを思わず口にする所などは、酒豪精一の面目躍如たるものがある。しかも末句に自名を織り込んで全体を締め括る点は非常に老練な手技である。こういった点から見ても詩格の隔たりは決定的であり、筆者は「夕棹漁者」は屋主の別号と解し、本詩は石田精一の作とするのが妥当と見る。よって本篇は小門に転居した騒客精一が自身の静穏閑適な日常を綴った佳吟とすべきで、現時点では長陽の詩家として誉望のあった精一の力量を知り得る唯一の詩篇と推断されるのである。

前掲の高杉最晩年の詩からは、病状が悪化した段階でも晋作が精一宅に進んで赴き、訪問を心待ちにした様子が伝わる。高杉は梅翁の豪放で陽気な人柄、豊かな学識・教養、さらには小門の風光明媚な景色を偏愛した。晋作にとり夕棹舎は英気を養うに恰好の場であった。後述する久保松太郎

の愛妓夕霧も同舎で療養しており、精一は意識的に一帯をヒーリング・スポットとして巧みに機能させていたのである。そこで晋作の生命力の活性化に一定の成果が得られた事実を軽視してはならず、争乱地の幽境に新たな付加価値を発見し、利用を試みた精一の着想力は高く評価される。

こういった精一の時宜を心得た対応は、高杉の没後に遺族や縁者の耳に達し、彼らに感激させたと思われる。他の藩医と比肩し得る過分な謝金が一介の町医に贈られた理由もこの辺りにあったのだろう。他医の場合は真正正銘の診察・投薬料であるのに対し、精一の5両は実質的には晋作を詩酒飲談によって励まし、快活な気分を取り戻させ、生への希望を少しでも持続させようと努力したことへの慰労・感謝の意味合いをより多く含む礼金であったと理解すべきものである。

両者の交際は慶応初の馬関で開始され、以後文事を基軸とする接触を重ねて短期間に深交へと発展したようである。書簡では慶応元年10月下旬(坂上忠助宛)に現れるものが最も早い。本信には晋作の精一に対する衷情が溢れている。以下には関連部分のみを示す。

此度書翰差出候義は別条には無之、尊兄学校御懸と承り、御願申上度義有之、態と呈書仕度候。吉田宰判はぶ浦之地下医石田精一と申者之子に、石田□平と申す者有之、当年十八歳、二三年前より日田へ好学に参り、長人厳禁に付、此節帰省罷在候。随分少年にしては詩文も可なりに出来候。其上人物余程温順にて、諸隊之戦士に相成候程の勇は無之候。乍爾文人も無之ては不相濟事に付、秀才の者は御引立有之候て宜敷様奉存候。当時之形勢に付、両国外にては遊学も仕る訳に不参、甚だ居候に付、御面倒之至候得共、老兄御門人に被仰付、学校入込被仰付候は、難有奉存候。窮生に付、御養に被仰付候は、猶更難有事御座候。学才は随分三飯生之功能は有之候様相考候。此生の詩文別紙御送仕候間、御読了可被下候。鴻城にてか萩にて不苦候。若し地下医にて六ヶ敷候は、弟之育にしても不苦候。千万御面倒之至候得共、御配慮

被下候様奉願上候。御返答次第、早速此生を差出候付、有無之御答早々被仰遣候様奉祈候。先は右為御頼如此御座候<sup>38)</sup>。

坂上は寄組士口羽家の陪臣ながら、萩藩校明倫館及び江戸藩邸内に設けられた有備館教授に登用された有能の士である。高杉は藩の学務に携わる坂上に精一の子の修学斡旋方を依頼した。□平は咸宜園云々の条りから前述の鉄平と断定できる。配慮は周到を極め、しかも手紙の一字一句に真心がこもっている。正直に性格が温順で戦士には不向きと伝え、だが優秀の部類に入るから給費生として藩校で学問させ、将来は文官で貢献させたいと書き送った。文中、身分上の問題があれば自分の「育」（はぐくみ）にしてクリアさせてもよいと述べる点は特に注目される。「育」は家督とは無関係の一種の養子制度で、立身の条件を改善するのに利用された。この措置を公言した所に晋作の精一に対する情誼の度が客観的に測定でき、両者の友情には予想以上の信頼関係が構築されていたことが判明する。

本件は同年11月2日付の木戸孝允宛書簡に「石田むすこにも御配慮被遣候段難有奉存候。早々山口より呼出有之候様被仰付度奉願候<sup>39)</sup>」と謝辞があり、晋作の願いは聞き届けられている。石田父子は高杉のたいそう親身な尽力に対し大いに感じ入ったに相違なく、以後も長くこの恩義を忘れることはなかった。

なおその後の石田鉄平について触れておく。鉄平は精一の次男であり、奇兵隊に入って仁平と改名する<sup>40)</sup>。当初は銃隊に配属されたが<sup>41)</sup>、慶応初に植生の旧家桐原家の育または養子となったように<sup>42)</sup>、以後は桐原仁平（仁兵、仁兵衛、甚平）を名乗って山口明倫館<sup>43)</sup>、三田尻海軍学校に学んだ<sup>44)</sup>。明治初に上京、開拓使仮学校に入学、勉学に励んだ結果、明治5年2月には江村次郎と防長入初の官費遣留留学生（農学系）に選ばれた<sup>45)</sup>。しかし半年後の8月に健康を害して帰国、翌6年2月28日に神戸病院で23歳で病没した<sup>46)</sup>。桜山神社の最後列に仁平の霊標があるが、引き立ててくれた高杉への謝恩を忘れず、奇兵隊士としての誇りを

生涯抱いて生きたことを証するため、実父石田精一が建立したのではないかと思われる。

## (b) 白石正一郎

清末領竹崎浦に薩摩問屋として繁盛し、そのかわら尊攘派志士を支援して自らも奇兵隊士であった白石正一郎は、すでに何度かその名が出たが、彼もまた精一の雅友であった。

『白石正一郎日記』を見ると、小倉屋白石家に入出した医家には、藤井玄碩、森玄道、松尾遊達、坂井龍眠、田村良益、松岡省己、国香万里等があり、精一は慶応期に入って家庭医のひとりとして処遇されている。初出は例の高杉略血時、つまり慶応2年9月4日の条である<sup>47)</sup>。翌3年3月13日には父卯兵衛を往診し、青山上総、片山高岳、大庭伝七、伊佐太郎らと一酌した<sup>48)</sup>。23日にも往診したが<sup>49)</sup>、卯兵衛は26日に80歳で大往生を遂げた。4月13日には高杉が没するから、この年は白石にとって哀悼の日々が続く。それを慰める意味もあってか、精一は「小キ鉢植ニツ、菊・牡丹<sup>50)</sup>」（慶応3年5月6日）を贈った。精一は豪放であった反面、このように優しい心遣いもできる繊細な一面を持ち合せていた。

5月23日には亡父卯兵衛の追善詩歌会が盛大に催され、これに精一も招かれた。参加者は長南梁・三洲父子、岡本松蔭、片山高岳、有馬菅道、橋本盛之助、林算九郎等、錚々たる地元知名士が多数招待されたが、近辺にあって格別に昵懇の仲となっていた精一の名は長父子の次位にあり<sup>51)</sup>、文久以来の著名韻士としての声望にいささかの衰えもなかったことがこれによって証明される。この当時の交際は萩・清末領の関係者が大半を占めており、精一が小門に移居したことによって交遊範囲に微妙な変化が生じていたことも察知される。

精一は小倉屋のホームドクターとしてもよく努め、8月11日には正一郎の孫娘たかの徹背看病に当たっている<sup>52)</sup>。その他、慶応4年1月18日には精一の世話で桑苗を百本購入、仮植えしたとの記事もあり<sup>53)</sup>、明治に本格化する正一郎の養蚕事業の最初期の仲介者が精一であったことを知る。正一

郎没後の妻加寿子の日記(明治15年11月13日)に「伊崎石田よりくわのはの代の事申来る」<sup>54)</sup>とあるのも精一であろうか。このように日常生活次元での交際も確認できることから、次第に両者は親密の度を増していたといえよう。正一郎の日記は明治13年まで書き継がれたが、上記の慶応末の記事を最後に精一の名を見ることはできず、その理由も定かではない。

高杉や白石周辺の人々と精一との緊密な交渉関係を念頭に置いて考える必要があるのが、『桜山歌集』<sup>55)</sup>(内題「招魂場桜山和歌集」)の巻頭に置かれた「石田道一」(よろづよもにほふさくらの山なれどなみだに曇る朧夜の月)なる人物である。本書は慶応2年に奇兵隊主催で桜山招魂場に殉難志士の英霊を祭った折、関係者の捧げた挽歌を収録した小冊である。奇兵隊の有名士では石田英吉、石田鼎三があるが、同年に海援隊士に転じた土佐人や小隊長級を冒頭に置くとはどうしても考え難く、その点、精一と見た場合、高杉、白石、片山との深交からも余程無理がなく、最も適合度が高いと思われる。筆者は「静逸」(詩)、「精一」(医)、「道一」(歌)と、異なる分野ごとに名字を筆名のように区別したのではないかと推測しており、ここに石田道一と石田精一の同一人説を提唱しておきたい。

#### (4) 野村望東尼の救出と密鑄銭事業

前節までに論じた石田精一像は、文人詩家としての雅客的側面が際立つものであったが、実の所、精一にはこれとは別に政治的方面からも興味深い行動が指摘できるのである。その第1が筑前の女流勤皇家として知られる野村望東尼の姫島救出に重要な役割を果たした点であり、第2が伊崎新地においての密鑄銭事業を建議し、かつ実働に際してもこれを主導した点である。

望東尼は僧月照、平野国臣、高杉晋作等を自らの平尾山荘に匿い、また筑前藩勤王派の国事密議にも関わったため、慶応元年の同派弾圧に連座して姫島に配流中であったが、晋作の指図で無事救出されてひとまず白石邸に落ち着き(9月17日)<sup>56)</sup>、次いで入江和作邸に閑居していた(11月

3日～)<sup>57)</sup>。望東尼は慶応2年11月7日付で長男貞則の嫁たね子(法号智鏡)に無事を報ずる手紙を書いたが、そこに幾つかの驚くべき事実が記されている。

さておのれたすけにこしゝことは、高杉ぬしに、藤が願を石田清逸が聞えしに、もとより高杉ぬしは我山ごと隠れすまれし昔のゆかりに、ことごとものせられてのはからひなりしよし、あまたのこ金をいれて、船よそひなりしぞかし<sup>58)</sup>。

この内容からは救出の意向が筑前の藤四郎よりまず精一に伝えられ、さらに精一が高杉に進言して実行に移されたことが知られ、精一が筑前藩に近く、萩藩勤王派との媒介者的位置にあったことを示している。この筑前藩士との密接な関係を解く鍵は、晋作の病状を心配する精一を描写した部分にある。精一は配所の苛酷な生活によって衰弱した望東尼を丁寧に診察して安心させたが、そこに精一と野村家との関係に言及する話が出て来るのであり、極めて重要な内容が含まれている。

肺癆と見ゆれば、石田もこまりたるさまになん、おのれも石田薬用にて大に安心いたし侍るぞかし、同人も野村家にはむかし恩ありとて、よろづねむごろに物し、おのれを迎の時も、大に尽力したるよし、ちかごろはインキリス、アメリカの医者来りて、高杉の容体も見たるよし、又小倉手おひのけが人の療治、めづらしきこともするよしなり<sup>59)</sup>。

高杉と精一の医者・患者としての心の通った付き合い、また自身への診療にも深く信頼を寄せる様子が印象的である。英米人医師による高杉の診察がもし真実ならば、本邦医史上にも有意義な発見となろうが、真偽の程は判らず、今後慎重に検討すべき話題である。

本節は医家精一の姿を描いた貴重な箇所である。望東尼の言によれば、精一はかつて野村家から何らかの恩義を受けていたという。いま両者の

交渉の細部は分からぬが、明治期、望東尼研究に先鞭をつけた三宅龍子は、精一が博多の蘭医百武万里門下であったことを述べ、この書簡も精一の尽力で旧師の手を経て望東尼の家族へ届けられたと説明している<sup>60</sup>。ただし万里は安政元年に没しており、この点については春山育次郎の記すように、旧師の嗣子（2代万里）を通じて渡されたと理解するのが正しい<sup>61</sup>。百武万里はシーボルト門下として博多に開業、県下初の人体解剖を行ない、また多くの弟子を育成して福岡蘭学の発展に貢献した<sup>62</sup>。これにより精一が蘭方を修めていた点が明らかとなる。精一と野村家との関係は蘭医学修業中の博多滞在に発端しており、その際に多数の筑前藩士との交流も成立したと考えられる。

ところで下関の町医の多くは、文久－慶応期に防長の宗支藩一丸となって挑んだ攘夷・対幕戦に駆り出され、隊附医、会所附医、軍陣病院雇医等に徴用され、傷病士の治療を担当した。これにより藩士との接触の機会も増え、政治意識が一段と高揚するに至った。その結果、下関町医には2つのグループが形成された。ひとつは医道を本務と心得、治療・研究、医育方面に尽力する人々で、その代表が石井信一であった。いっぽうで大塚柳斎のように諸隊士の徴募に積極的に協力、自ら民兵を組織して郷土防衛に参加することを企てた医家もあり、この第2のグループ、つまり政治意識の旺盛な民間医家の出現こそが幕末における下関医界の大きな特色であった。大塚は萩の出身で新地会所附医でもあり、地縁と公権によって政治的発言力を確保したが、精一の場合、赤間関病院や奇兵隊病院との関係が見出されず、むしろ著名な長陽の雅人としての評価が萩士との接近を容易にし、その方面の交渉を土台に政治的問題に目覚め、実践行動へ昇華させたと見るべきである。その意識と行動は、慶応2年3月22日付の木戸宛書簡に確認される。時候の挨拶等は省略し、肝心部分のみを掲げる。

陳は先日御内々申上候錫銭之義、此度会所より御乞合に相成候趣、何卒宜御全儀被仰付早々相済候は、御国益に相備り候はんと奉存候。既

に職人も巧手之者七人雇入、兩三日中より追々細工に取掛申候。真鍮象眼も不遠仕立させ奉入御覧候。万事宜御聴取可被遣候。右御願迄に以書中如此に御坐候<sup>63</sup>。

追伸には「尚々上国景勢書、百銭図書附等は会所より定而参り候はん付、私よりは差出不申候<sup>64</sup>」とある。一見して解るようにこれは銭貨の密造に関する話題である。しかも本件は精一から木戸へ内々に上申され、木戸が新地会所に対して検討の上、採否を決定するようにと連絡したようである。精一は未済の段階から熟練工を7人も雇用し、近々仕事に着手すると告げ、本件を一挙に既成事実化し、かなり強引に事業の推進を図ろうとしている。書中の「錫銭」「細工」「職人巧手」「真鍮象眼」の語から考えるに、精一は当地に大規模な鑄造施設の開所を要請したのではなく、他所で密鑄した銭貨の加刀磨調による修正を担当する加工場の設置を進言したものと見られる。対象銭貨は改鑄益の大きい天保通宝と考えるのが妥当で、低品位の当百銭を私鑄して軍事費に充てるのが主目的であったのだろう。萩藩の模造天保銭では小郡製が知られるが<sup>65</sup>、下関でも天保銭密鑄に関わる何らかの工程が行なわれていた可能性が極めて高い。幕末の萩藩を襲った未曾有の危機は膨大な戦費調達を必要とし、元治期から密鑄事業が始まったことは既に指摘がある<sup>66</sup>。しかし伊崎宰判管内での鑄銭は初聞である。慶応2年春は精一の試作段階に過ぎぬが、後に藩営事業への移管を示唆する記事がある。後述の久保日記に翌3年春の時点で小門に錫細工屋のあったことが明記され、萩藩が借土地の伊崎で精一の献策を容れて天保銭を偽造したことはほぼ確実である。なお本件の発案には以前から精一と繋がり深い福岡藩での筑前通宝の密鑄が強く意識されたのではないかと思われる。

以上、野村望東尼の救出に積極的に関与し、また具体的な時務策をもって密鑄銭事業の実行を木戸に迫った点などは、精一の風流文人でも医家でもない経綸の才覚を示しており、幕末馬関の俠医群中にあっても相当にユニークな位置を占めている。

たことが実感される。

白石日記は慶応4年1月18日時点での精一の小門居住を示していたが、その後も同地を離れていないことは『久保松太郎日記』が証明する。高杉と同じ松門の久保は主に民政・財務畑を歩んだ能吏である。下関との縁も深く、慶応3年に伊崎代官を兼ね、明治初年に専務となった。日記にはわずかに3カ所に登場するのみであるが、そのどれもが重要な情報を提供しており、目下の所、明治初における精一の動静が把握される唯一の資料である。

慶応2年9月13日、越荷方役人の大塚正蔵が会所内で原因不明の自殺を図った。その際に精一と長野昌英が治療に当たったが、大塚は同日中に死去した<sup>67)</sup>。長野は内科医であるが、緊急性の高い重度の銃創治療に呼ばれた点から見て、あるいは精一の専門は蘭方を主とする外科であったのかも知れない。また新地会所の御用医師であった可能性も浮上してきた。

次いで慶応3年3月15日にその名を見る。いったん帰萩した久保は同年12月末に再び馬関越荷方に出役、2月には馬関応接方御用取計を命ぜられ、3月に再々出関となった。

温戸錫細工屋へ行。石田精一方にて夕霧病ヲ訪、片山貫一・林算先在。夜半新地より船にて帰。温戸漁火、月昇り、前山淡濃ト望、誠ニ絶景也。夜半帰<sup>68)</sup>。

「温戸」は「小門」に等しい。前述の通り冒頭の記載を粗略に扱うことはできない。精一が木戸に進言して約1年後、小門に錫細工場が出現しており、そこを萩役人の久保が訪問したことの意味は甚だ大きい。石田邸の近傍に設けられたこの加工場は密鑄用の種銭製作所でもあったろうか。いずれにせよ精一の意見は採用されたと見られ、しかも藩の手によって事業化されていた可能性が高いのである。

最後は明治2年4月6日の「午前小酌。夕より温戸に行、石田精一ヲ訪。来会者甚多。夜帰三更<sup>69)</sup>」という記事である。精一が明治2年春まで

は確実に小門にいたことがこれにより判明する。慶応期に沖島から伊崎に転居して以来、最低でも4、5年は当地に居住しており、しかもその間、馬関文人の領袖として敬慕され続けた点は「来会者甚多」という表現からも首肯されよう。精一は維新後も大勢の騒客に囲まれて、賑やかに風流な生活を楽しんでいたのであり、当地の雅医としての威望も相変わらず維持されていた。

しかしこれ以後、石田精一の名を文献上に確認することは出来ず、没年も含め廃藩後の軌跡は今もって杳として掴めないのである。

## おわりに

本論は医家石田精一の生涯を点としてつなぎ合わせたに過ぎない。しかし、この断片的な記録から今日まで全く知られずにいた精一の経歴や私生活を含め、人物の輪郭がある程度は可視化できたかと思う。本論で明かされた点を簡伝風にまとめると次のようになるろう。

石田精一(静逸、号梅堂)はもと長門国厚狭郡埴生浦に暮らす医家であった。筑前博多の百武万里に医術を学び、帰郷後は蘭方を主として流行医となる。生来の雅人氣質と経済的余裕の生じたことによって詩文書画への関心を高め、諸方の名家や来崎清人の作品で充実した書画帖は、篠崎小竹の序が巻頭を飾った。また自身も長陽の詩家として高く評価され、北浦詩壇の雄たる古谷道庵から交誼を懇望されるほどの実力を示し、嘉永末には地方文化人としての声望がほぼ確立しつつあった。

安政初に下関へ一家で転住、王子町の沖島に開業した。文久期には本関を代表する雅医として同好の士を率い、大酒豪の社交家として文人間にその名を馳せた。来関の詩人画客には精一との雅交を希望するものも少なくなかったが、文久3年の広瀬旭荘との交流などはまさにその好事例といえるものであった。

慶応期には景勝地として名高い小門に夕棹舎と命名した瀟洒な別宅を構え、医業及び詩家としての活動拠点をこれへ移した。当時伊崎は本藩領に移管し、交際範囲も萩士及び周辺の町役富商へと広がりを見せ、政商白石正一郎は精一の雅医とし

ての力量を大いに認めた。粹人高杉晋作とは短期間で知己となり、数ある馬関の町医中で最も信頼を寄せる主治医兼詩友として手厚く遇された。精一はまた萩藩尊攘派と連繋する筑前正義派の諸士とも交流が深く、流罪となっていた野村望東尼の姫島救出計画に関わり、高杉を動かして成功へと導いた陰の功労者であった。いっぽう密鑄銭事業を木戸孝允に建策、当地において計画から実働まで一貫して主導的役割を果たしており、政治的行動にも注目すべき点がある。

咸宜園出身の次男鉄平(桐原仁平)は奇兵隊士となり、維新後は成績優秀をもって山口県士族として初の官費ロシア留学生(開拓使)となって渡航したが、半年で帰国、病状は好転せず、明治6年、惜しまれつつ神戸病院で逝去した。23歳という若さであった。

精一の明治2年以後の消息は現時点では把握できず、墓所・生没年等も一切判明していないが、その足跡を見る限り、長州正義の士として変革動乱の時代をしたたかに生き抜いた医傑であったと結論することができる。

以上によって今日までほとんど無名であった石田精一という本州西端の町医師が、文人交流史や政治史の方面からも軽視できぬ存在であったことが理解されたのではないかと思う。今後は本論を契機にこの隠れた巨星の正しい評価と顕彰がなされ、さらにいっそうの発展的考察が行われることに期待している。

なお今回、幕末馬関における軍陣医療の展開中に精一の位置を探ることができなかった。精一がこの方面に関与したことは十分に想定されるが、萩藩の好生局が残した「攘夷以来諸所病院出張医官勤功名録」<sup>70)</sup>(文久3年—明治2年)、及び「戦場出張医員御賞美沙汰」<sup>71)</sup>(明治2年)にその名はなく、また筆者の把握する馬関の町医で徴用された10数名の雇医中にも含まれておらず、とにかく今回は軍陣医療への積極的な関与の有無を検証するには至らなかった。石田精一と萩藩の軍陣医療の関係については研究を継続し、新事実を発見次第、改めて報告することとしたい。

## 注

- 1) 一坂太郎編。高杉晋作史料3。神式葬儀費用および形見分け覚え書。周南：マツノ書店；2002。p.71
- 2) 村田峰次郎。高杉晋作。東京：民友社；1914
- 3) 横山健堂。高杉晋作。東京：武俠世界社；1916
- 4) 梅溪昇。高杉晋作(人物叢書232)。東京：吉川弘文館；2002。p.296
- 5) 青山忠正。高杉晋作と奇兵隊(幕末維新の個性7)。東京：吉川弘文館；2007。p.202
- 6) 海原徹。高杉晋作一動けば雷電のごとく(ミネルヴァ日本評伝選)。京都：ミネルヴァ書房；2007。p.241
- 7) 注1) 同。1。No.321。p.312
- 8) 山陽町史編集会編。山陽町史。山陽小野田：山陽町教育委員会；1984。p.410-411
- 9) 山口県文書館編。防長風土注進案。吉田宰判16。周南：マツノ書店；1983復刻。p.190
- 10) 同上。美祿宰判17。長登村百姓平右衛門家筋書。p.465
- 11) 田中助一(防長医学史。東京：聚海書林；1984復刻)の掲出した医業登録に関する安政4年の萩藩記録には「陪臣地下医町医」「家来医」(p.59-60)が見え、別に明治3年の規則改正に際する布達中には「陪臣医」(p.86-87)が確認される。田中博士は「家医」(p.166等)をも同義に使用し、さらに古谷道庵は自身の役職を「邸医」と記している(古谷道庵日乗。巻1。天保7年6月29日の条。下関市立豊浦図書館蔵自筆稿本)。
- 12) 篠崎小竹。小竹斎文稿3。浪華詩文稿下。上方芸文叢刊7-2。自筆稿本影印。同叢刊刊行会。東京：八木書店他；1980。p.301-302
- 13) 矢上快雨編。宜園百家詩。初編巻4。浪華。群玉堂；天保12年刻。富士川英郎等編。詞華集日本漢詩11。東京：汲古書院；1984。p.93
- 14) 古谷道庵。古谷道庵日乗。巻35。
- 15) 同上。巻40。嘉永7年3月14日の条
- 16) 山陽町郷土史研究会編。山陽史話2。山陽小野田：山陽町教育委員会；1971。p.77-78
- 17) 藩公訓論(嘉永5年2月。卷子仕立。下関市立文書館蔵)の第7条に「新入の医者有之候節は処々に召出して、頭取より取調于業、新出来立候人柄に候ハバ、御医師中に申出、一応召連、何成相对議候上、様子により医道研究の精疎をも試、一統承知の上、住居可差免事」、第9条に「縦令御医師中の門人と申候共、御領内に開業の節は一応御医師中試の上、相応に出来立候者に有之候ハバ開業可差免事」と見える。
- 18) 下関市教育委員会編。白石家文書。補遺。下関：下関市教育委員会；1989。p.82。安政3年6月2日の三島道樹(広瀬元恭門人、豊前築城郡越路村出身)開業世話依頼(白石は拒否)の1件が参考となる。

- 19) 広瀬旭荘. 日間瑣事備忘録. 後編巻3. 多治比郁夫編. 広瀬旭荘全集. 日記編6. 京都: 思文閣出版; 1984. p. 223
- 20) 同上. p. 224
- 21) 同上. 日記編9. 後編巻49. p. 164
- 22) 日田郡教育会編. 増補広瀬淡窓全集下. 入門簿(林外時代)巻1. 京都: 思文閣出版; 1971復刻. p. 117
- 23) 同上. 巻3. 松浦 = p. 121. 恵雲・連城 = p. 122
- 24) 注21) 同
- 25) 同上
- 26) 同上. 後編巻50. p. 174
- 27) 同上. p. 176
- 28) 注18) 同. p. 76
- 29) 注21) 同. 10月21-22日 = p. 169. 25日 = p. 171. 11月3-4日 = p. 176
- 30) 下関市教育委員会編. 白石家文書. 7月22日の条. 下関: 同委員会; 1968. p. 140
- 31) 李家文厚は主に萩藩の好生堂で学んだが, 熊野祥甫はボンペ・松本良順門, また竹田佑伯は柴田方庵, 緒方洪庵の下で修業した.
- 32) 注1) 同. 2. p. 419-420
- 33) 注30) 同. p. 525
- 34) 落合濟三. 虚舟遺稿下. 1891. 萩: 私家版; p. 2
- 35) 拙考. 彦島関係碑誌三種の訓釈と考察Ⅲ-伊崎襟流亭扁額文. 福岡県高等学校国語部会. 北九州地区部会. 北九州国文 1996; 29: 35-45
- 36) 注32) 同. p. 447
- 37) 同上. p. 536
- 38) 注7) 同.
- 39) 同上. No. 322. p. 313-314
- 40) 山口県編. 山口県史史料編. 幕末維新6. 忠勇義烈長藩奇兵隊名鑑. 山口: 山口県; 2001. p. 335
- 41) 下関市文書館編. 資料幕末馬関戦争. 諸隊惣人員帳. 奇兵隊人数附. 乙丑二月改. 第一銃隊. 四ノ伍(石田甚平). 東京: 三一書房; 1971. p. 324
- 42) 埴生には現在も石田, 桐原家が存在する. 計5家に書状で問い合わせた所, 石田正継氏と桐原勝輔氏令夫人より御返信を頂いた. 石田氏は65年当地に暮らす子が孫に該当せず, 精一には心当たりがないという. 桐原氏も同様ながら, 厚狭の桐原氏の分家に当ることを知った. 代々鴨庄に住む桐原氏は萩藩老臣熊谷家(寄組千石)の一門家老(百石)を勤め, 毛利氏の中国太守時代以来の古格を誇る名家である. 新興の勤王医家の養子縁組先としては, たとえ分家筋であろうが申し分ない相手と思われ, 本件から地域における石田家の位置が察せられる. また鴨庄本家からは幕末期に萩藩医久坂文仲, 厚狭毛利家医桑原玄蟠に女を嫁がせており, 藩内医家と緊密な交渉を有していた. その点を参考にすれば石田家との接触も十分にあり得たかと思われる. 御両家とも調査継続を約して下さい, 今回の御協力に深謝申し上げますとともに今後の新情報に期待したい.
- 43) 田中彰監修. 定本奇兵隊日記上. 周南: マツノ書店; 1998. p. 624
- 44) 同上. 中. p. 511
- 45) 田中彰. 北大百年の諸問題札幌農学校と米欧文化. 北海道大学編. 北大百年史(通説). 北海道: 北海道大学; 1982. p. 496
- 46) 桐原仁平霊標刻文(桜山神社. 下関市)
- 47) 注30) 同. p. 147
- 48) 同上. p. 157
- 49) 同上. p. 158
- 50) 同上. p. 160
- 51) 同上.
- 52) 同上. p. 161
- 53) 同上. p. 168
- 54) 注18) 同. p. 502
- 55) 白石正一郎. 片山高岳編. 桜山歌集(招魂場桜山和歌集). 奇兵隊蔵板. 赤間関: 1866
- 56) 注30) 同. p. 147-148
- 57) 同上. p. 151
- 58) 三宅龍子. 贈正五位野村望東尼. 東京: 政教社; 1911. p. 131
- 59) 同上. p. 134
- 60) 同上. p. 123
- 61) 春山育次郎. 野村望東尼伝. 東京: 文献出版; 1976. p. 340
- 62) 武内博編著. 日本洋学人名事典. 東京: 柏書房; 1994. p. 313-314
- 63) 木戸孝允関係文書研究会編. 木戸孝允関係文書1. 東京: 東京大学出版会; 2005. No. 43. p. 171-172
- 64) 同上. p. 172
- 65) 瓜生有信. 天保銭事典. 東京: 歴史図書社; 1976. p. 214-237. 日本古銭贋造史. 東京: 天保堂; 1989. p. 51-54. 幕府諸藩天保銭の鑑定と分類. 東京: 天保堂; 1983. p. 39-47
- 66) 山本勉弥. 毛利藩貨幣. 萩文化叢書7. 萩: 萩文化協会; 1954. p. 25-26
- 67) 一坂太郎. 蔵本朋依編. 久保松太郎日記. 周南: マツノ書店; 2004. p. 570
- 68) 同上. p. 635
- 69) 同上. p. 811
- 70) 攘夷以来諸所病院出張医官勤功名録. 山口県文書館蔵. 藩政文書. 毛利家文庫22. 諸臣99
- 71) 戦場出張医員御賞美沙汰. 同文庫36. 賞典22

# Seiichi Ishida, a Chief Physician of Shinsaku Takasugi: Culture and Politics as Seen by a Doctor of the Reformation Period

Kazukuni KAMEDA

Kyusyu International University, Senior High School

This is first paper on Seiichi Ishida, who worked as the Bakan town doctor at the end of the Edo period. Seiichi was initially a private practice physician of Habuura, Asa-gun. He then studied Dutch medicine under Banri Hyakutake of Hakata and on his return home he further prospered. From the Kaei period, the assessment of Seiichi as an artistic, cultured person became high and at the beginning of the Ansei period he moved to Okinoshima of Shimonoseki. By the Bunkyu period, Seiichi held an important place in the history of cultural exchange among Shimonoseki's cultural figures. In the Keio period he moved to Odo, which was to the West of Isakiura and further inland. It was a very tranquil and beautiful place. It was from around this time that his socialization commenced with samurai belonging to the reformist group of the Hagi Domain. Shinsaku Takasugi in particular, adored Seiichi as a friend of the heart who loved Chinese poetry, and trusted him as his chief physician. Furthermore, Seiichi's political activity intensified and it has become clear that he was deeply involved in rescuing Botoni Nomura from Himeshima and the Hagi Domain's production of counterfeit currency.

**Key words:** Seiichi Ishida, Kyokusou Hirose, Shinsaku Takasugi, support for Botoni Nomura's rescue, conceptualization of counterfeit currency production